

乗雲

寺報

第101号

H30.5.1 発行

編集人

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560
広厳寺
住職 神田英俊

メール

otera@kogonji.jp

道元さまの誕生

曹洞宗の開祖で、大本山永平寺の開山である道元さまは土御門天皇の正治二年（西暦1200年）一月二六日京都にお生まれになる。幼少より優れた才能を表し、文殊菩薩の再来と言われ、幼名「文殊丸」とも呼ばれていた。この絵はご懐妊の様子である。

道元禪師御一代記押絵
（広厳寺HPより）



この押絵は住職妻の母 秋田県湯沢市平成三十年二月二十四日逝去、享年百四（が七十代の頃に道元禪師さまのご生涯を押し絵で作製したものです。全部で十枚。HPより掲載します。

志の到らざるじは

無常を思わざるに依るなり

正法眼蔵随聞記

梅花流詠讃歌の中に、「昨日の人は今日はなく、会えば別る世のならない」（無常御和讃）とあります。どんなに愛おしい人でも、どんなに大切な人でもやがて別れの時がやって来ます。昨日、今日、明日と毎日がいつも同じようにやってくる、常に変わらないものかと思いがちですが、みな偶然そうなっているだけです。しかしながら死だけは間違いなく必然です。私は死なないなんて人は誰もいません。これを無常といえます。

正法眼蔵随聞記は親しく道元禪師についてその教えを受け継ぎ、後に永平寺二世となられた孤雲懷奘禪師が聞くにしたがって書きとめたものです。

「仏祖の道はいつでも開かれている。それを極めるか、そうでないかはその仏道を得るといふ志があるかないかである。志が到らないのは、無常ということをよく考えないからである。生きていくわずかの間にも、時をむなしく過ごしてはならない」

今年も境内の桜が見事に咲きました。毎年美しい姿を見せてくれます。しかし、パッと咲いて満開になったと思ったら、あとは散るだけです。良寛さんは、「散るさくら 残るさくらも散るさくら」と詠みました。散っていくからこそ、咲いているときの桜がとても美しく感じられるものです。同じように人間もやがて死すべき命だから尊く有難いのです。この世の無常を観じながら、正しいことのみに心を費やしてまいりましょう。

*平昌五輪ではカーリング女子が大活躍。「そだね〜」が流行語に、新潟は「んだね〜」。秋田の母には「んだすな〜」って、温かい言葉をいただきました。

平成三十九年度年回表

〔回忌〕

〔没年〕

一周忌	平成二十九年
三回忌	平成二十八年
七回忌	平成二十四年
十三回忌	平成十八年
十七回忌	平成十四年
二十三回忌	平成八年
二十七回忌	平成四年
三十三回忌	昭和六十一年
五十回忌	昭和四十四年
百回忌	大正八年

▼平成三十九年度の年回忌表です。正当各家には昨年十一月に通知していただきますのでご確認ください。

▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせいたします。

▼「一周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌、丸十二年目が十三回忌となる。